

追悼

守永英子先生を偲んで

藤崎眞知代

元お茶の水女子大学幼稚園教諭の守永英子先生が、平成十九年二月九日の朝に永眠されました。享年七十四歳でいらつしやいました。訃報に接し、あの穏やかな笑みと優しいお声が思い起こされ、何とも言いようのない寂しさを覚えました。

守永先生は、お茶の水女子大学家政学部児童学科を昭和二十九年に卒業された後、一年間、私立幼稚園に勤められました。その園長先生に保育者としての天性の資質を認められ、改めてお茶の水女子大学で幼稚園教諭の免許を取得され、昭和三十一年四月から平成二年三月まで、お茶の水女子大学附属幼稚園教諭として、保育一筋に歩んでこられました。

私が初めて守永先生にお目にかかったのは、当時、日本女子大学にいらした古澤頼雄先生が主催されている子どもキャンプに参加した時でした。そこでのスタッフの姿勢は、一人ひとりの子どもが一日の過ごし方を自分で決めて実現していくように、見守り支えることでした。私をはじめ学生スタッフに向けられた守永先生の言葉は、優しい響きをもちながらも、子どもとのかかわりを振り返りつつ、スタッフ一人ひとりの枠組みを問う、鋭く厳しいものでした。

その後、私がお茶の水女子大学大学院に進んだこともあり、守永先生の保育を十年以上にわたり継続

して観察させていただくことになったのです。「保育で大切なことは、小さなことの中にある」という信念のもとに、子どものちよつとした表情やしぐさ、何気なくもらす言葉をとらえて、子どもの心を感じ、心を重ね、そして子どもの育ちを支えることに、どれほど心を砕かれていたことでしょう。保育後、ある場面での子どもとのやりとりについてお尋ねすると、守永先生がその時子どもに発せられていた言葉の背後に、保育者としての迷いや葛藤、そして願いがあり、その言葉に託された意味深さを知って、しばしば驚かされました。

こうした保育をめぐる思いと子どもや保護者とのやりとりの過程を、守永先生はご自身の言葉で本誌に、「保育の中の小さなことと大切なこと」（昭和五十一年～五十二年）と題して連載されています。そして、読者の期待に応える形で二度にわたって続編も掲載されたのです（昭和五十五年～五十七年、昭和六十一年～六十二年）。

退官されてからも、「思い出の中の保育」（平成三年～四年）の連載では、現場を離れたことで見えてくるものを熱く語られ、保育者としての熟達過程を歩み続けておられる姿を拝見した思いがしたものです。また、「保育を考える会」の方々と、これまでの連載に込められた思いや、いつの時代にも通底する保育への思いを、『保育の中の小さなことと大切なこと』（平成十三年、フレール館）にまとめられたことは、多くの読者がご存じのことと思います。

日本保育学会第45回大会が平成四年にお茶の水女子大学で開催された折に、守永先生のクラスの三年間の保育記録をまとめたVTRを上映させていただきました。ご葬儀では、そのVTRに登場した子どもたちと会うことができ、守永先生が引き合わせてくださったと思っています。保育の質が問われる今日、守永先生が残してくださったものの多いことに感謝しつつ、心より先生のご冥福をお祈り申し上げます。

（明治学院大学）